

あとがき

巻頭言で三輪前学長が大学における教育と研究について言及され、両者が表裏一体のものとして大切である事を指摘しておられる。当然ながら、教育と研究は独立した別々のものでなく、学問（科学と言ってもいい）と言うただ一つのもの異なった側面だからであろう。

西欧流の科学（医学も含めた）が我国に入ってから間もない明治初期に招かれて来日し、東大で教えた独人医師ベルツが「西洋の科学の起源と本質に関して、日本ではしばしば間違った受け取り方がなされているようだ。日本では西欧人の科学の成果を引き継ぐだけで満足し、その成果を生み出した精神を学ぼうとしない」と言ったとされる（最近の新聞記事）。その事情は平成の今でも余り変わっていないように思われる。精神と言うと堅苦しくて道徳めいて響くが、『他の動物と違って、人間だけが持つ知性という創造的な営みへの敬意と憧れ』と言い換えてみよう。それが持てるか否かは心構えや努力にかかるよりも人それぞれの感性のようなものにかかると思われ、その感性は人間の直接の触れ合いを通して人から人へ感動をもって受け継がれていくような性質のものと思われる。それが西洋（特にヨーロッパの）社会

に長年の精神的伝統の厚みの中で（科学の専門家の間にもみでなく）育って来たものであり、くやしいが短期の真似では我々の社会が所有出来ないものである。近年、世界の第一線の研究者は“Publish or perish!”と言うような血みどろの競争をそれぞれの分野でしており、それは人間の知的営みとしての科学の一面がアメリカ的な競争の場で強調されたもので、プロとして小気味よく華々しいが、それが科学の極致でも全てでもない。それを越えたものがある事をベルツ医師の指摘が教えている。知性はノウ・ハウのような知識とは違う。それが分からなくて競争と能率だけを真似れば、中身の質をそっちのけにした論文の数かせぎが横行し、教育の場では上手に管理された詰め込みが行われるだけになってしまう。

知性とは我々それぞれにとって何なのか、それによって自分が人間の誇りと感動を持てるのかどうか、めいめいが確かめ直してみようではないか。そのようにして、知性の尊重されている事が実感出来る大学になろう。それが三輪前学長の残された問題提起に応えるための基本的な手段と目標のように思われる。（小林春雄 記）

幹事会（要旨）（平成4年3月）

1. 英文校閲者バロン教授に平成4年1月29日付で、委員を委嘱した。
2. 臨床懇話会：第218回開催報告および第219回開催（予定）が決められた。
3. 編集方法および審査方法について討議した。
4. 略語の用い方等について、投稿規程を再検討することとなった。
5. 次回5月27日（水）幹事会終了後に評議員会を開催することとなった。

編集委員会

伊藤久雄（会長）
三浦幸雄（副会長）
網野三郎（ 〃 ）
岩根久夫（庶務幹事）
小柳泰久（ 〃 ）
渋谷健（編集幹事）
高山雅臣（ 〃 ）
友田燁夫（会計幹事）
山澤瑠宏（ 〃 ）
伊東洋（委員）
白井正彦（ 〃 ）
内野善生（ 〃 ）
加藤治文（ 〃 ）
古賀道之（ 〃 ）
斎藤利彦（ 〃 ）
小林春雄（ 〃 ）
林徹（ 〃 ）
J. Patrick Barron（ 〃 ）
藤波襄二（監事）
内田安信（ 〃 ）

平成4年4月20日 印刷

平成4年5月1日 発行

東京医科大学雑誌 第50巻 第3号

発行者 伊藤久雄

発行所 東京医科大学医学会

（東京医科大学総務部企画調査課内）

東京都新宿区新宿6-1-1

TEL (3351) 6141 (代)

印刷所 共立印刷株式会社

東京都中央区新川2-23-9

TEL (3551) 9891 (代)